

## 55. 竈の神から癒しの神へ

# 医事万華鏡

季節は秋。秋と言

えば、〳芸術の秋〳であり、

〳食欲の秋〳でもあります。多

くの実り豊かな食材に恵まれる秋

こそは、料理の腕を振るうこともま

た楽しみの一つです。

さて、料理をするには台所やキッチンが必要です  
が、薪を燃やして煮炊きをしていた時代は、食事を作る場  
と言えば「竈」でした。火が明々と燃え盛る竈を中心に家  
族が集まり、煮炊きや暖を取り、また客人をもてなしたり等、  
日々の営みを行ってきました。

そんな竈という場には、守り神、つまり台所や食べ物・  
調理の神様が宿ると認識されてきました。なぜなら火は調  
理をしたり暖を取ったりするための火であると同時に、外  
敵から身を守るための火であり、いわば生きていく上で欠  
かせない存在であるがゆえに、人々は火の中に、〳神聖性〳  
を見出してきたからです。この竈の神様として、ギリシア  
神話の処女神ヘステア（ローマの女神ウエスタと同一視  
される）が有名ですが、わが国にも竈の神様が存在します。

その日本の竈の神様には、神社系と仏教系の  
2系統が存在し、神社系の神様としては、竈を  
司る神としての奥津彦神・奥津姫神に、火の神  
様とされる迦具土神の三神を合わせた「竈三神」  
が祀られています。一方、仏教系の神様には、

三宝荒神と呼ばれる如来荒神・鹿乱荒神・忿怒荒神がいます。

「荒神」という名から推測されるように、普段は人間生活に

多大な恵みを与えてくれる火の神は、一方で家や財産等を焼

き払ってしまう荒ぶる面を備えていることが示唆されます。

そんな側面から転じて竈の神様の恩恵に与えるには、竈を常に

清潔に保っておく必要があるという戒めが生まれるのです。

さて昨今、医療においては「地域包括ケアシステム」の構

築が期待され、その中で「かかりつけ医」の役割の重要性

をよく耳にします。一見すると無関係に思えますが、そんな

医療にホスピタリティが求められている時代こそ、かつての

家々に存在していたような竈を中心とした暖かさや温もり〳

を伴った癒しが求められているのではないのでしょうか。

今ではオール電化の家庭が増えたことで、生活は便利にな

りましたが、その便利さと引き換えに、かつて崇拜してきた

「火の霊力」が失われてはいないでしょうか。ただ、日本の

神様は実に懐が深く、竈が消え、火を使わない台所であって

も、竈の神様からのご利益を与えることはできそうです。

実りの秋。自然への感謝と共に、普段はその有難さを見過

ごしがちな台所、そこに御座します竈の神様に祈りを捧げら

れてはいかがでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

